

## 医学生が必要と実感した多職種連携教育

金田祐一郎<sup>1)</sup>, 庵谷千恵子<sup>2)</sup>, 桑原篤憲<sup>2)</sup>,  
長谷川真紀<sup>3)</sup>, Raphael Hawkins<sup>3)</sup>, 橋本美香<sup>3)</sup>

1) 川崎医科大学 第3学年

2) 川崎医科大学 総合臨床医学教室

3) 川崎医科大学 語学教室

(平成30年11月27日受理)

Interprofessional Education Essential for Medical Students: A Medical Student's Perspective

Yuuichiro KANEDA<sup>1)</sup>, Chieko IHORIYA<sup>2)</sup>, Atsunori KUWABARA<sup>2)</sup>,  
Maki HASEGAWA<sup>3)</sup>, Raphael HAWKINS<sup>3)</sup>, Mika HASHIMOTO<sup>3)</sup>

1) *Third grade, Kawasaki Medical School*

2) *Department of General Medicine, Kawasaki Medical School*

3) *Department of Linguistics, Kawasaki Medical School*

*(Accepted on November 27, 2018)*

### 抄 録

＜背景＞多様化する医療ニーズに対応するため、多職種連携教育 (Interprofessional Education, IPE) が求められている。

＜目的＞現役医師がIPEに対してどのように考えているかを明らかにする。

＜対象＞規模や地域の異なる医療機関に従事する医師 (医師免許取得後5年以上) 3名と川崎医科大学附属病院に勤務する初期研修医30名

＜方法＞経験年数、職場環境の異なる医師3名に対し、IPEに関する面接調査を行った。初期研修医に対し、IPEに関するアンケート調査を行った。

＜結果＞医師3名に対する面接調査では、初期研修医終了以降に多職種連携の必要性を認識するようになっていた。さらに、多職種連携を行うため、高いコミュニケーション能力や多職種への理解が必要で、卒前に多職種連携教育を行うべきだと認識していた。初期研修医へのアンケート調査では、初期研修医は卒前多職種連携教育の機会が不足していると感じていた。さらに、医師以外の医療スタッフの業務内容を十分に理解していなかったと感じていた。

＜結語＞医学生低学年時からIPEは必要である。

キーワード：多職種連携教育 (IPE), 多職種連携, 医学教育, カリキュラム, 面接調査, アンケート調査

## Abstract

**Background:** With diversified medical needs, there is a growing need for interprofessional education (IPE).

**Objective:** The present study aims to investigate the perspectives of medical doctors concerning IPE.

**Research participants:** Research participants include three medical doctors from three different institutions of different areas and sizes, who have at least five years of working experience, and 30 junior residents from the Kawasaki Medical School Hospital.

**Methods:** Three medical doctors with different years of experience and working environments were interviewed and junior residents were given a questionnaire concerning IPE.

**Results:** The interview with three doctors revealed that they became aware of the importance of IPE after completing the junior residency. They stressed the need for IPE for medical students in order to acquire strong communicational skills and sufficient understanding of diverse medical professions that are required for team medical care. The results of the questionnaire survey showed that they found the opportunity for medical students to receive IPE inadequate. The survey also indicated that they did not have sufficient understanding of other medical staff's roles and responsibilities.

**Conclusion:** IPE for medical students should begin in their early years.

**Key words:** interprofessional education, interprofessional work, medical education, curriculum, interview survey, questionnaire survey

## 1. 背景

日本の医療を取り巻く現状として、少子高齢化、疾病の慢性化・複合化、治療・療養に対するニーズの多様化が挙げられる。さらに、2025年には65歳以上の団塊の世代が後期高齢者に突入し、疾病構造の変化や要介護者の急増など医療や福祉の分野でも非常に影響が大きいと予想される<sup>1)</sup>。また、近年の医療現場は、医療の質や安全性の向上および高度化・複雑化に伴う業務の増大への対応、病院の機能分化、在宅医療・福祉サービスの充実が求められている<sup>2)</sup>。

多様化する医療ニーズに応えるためには、多くの職種が連携・協調し、情報の共有と十分な討議により患者中心の最善の医療を協力して実施する多職種連携が求められる。多職種連携は、2000年に施行された介護保険制度において、ケースマネジメントの手法とともに取り入れられた理念である<sup>2)</sup>。実際、介護保険制度が始まって以来、在宅ケアの現場において、多職

種協働という言葉は定着し、その必要性については広く認識されるに至っている。在宅医療から高度医療まで多職種連携が前提の医療も多く、情報共有の不足による医療ミス、医師不足・偏在などの課題の解決にもチーム医療の実践が望まれている。厚生労働省の「チーム医療の推進に関する検討会 報告書」のみならず、医学教育モデル・コア・カリキュラム(平成28年3月)では、卒業時までに修得すべき9つの「基本的な資質」のなかに「チーム医療の実践」が明記されている<sup>3)</sup>。すなわち、チーム医療の推進やその教育は、今後の日本の医療において不可欠な課題である。

上記のように日本の医療職教育は、このニーズに応えるべく新たな改革のステップを迎えており、大学ごとに特徴ある取り組みが試みられている。例えば、札幌医科大学では地域を基盤とした地域基盤型医療実習、長崎大学では在宅医療・福祉コンソーシアム長崎の取り組み、昭

和大学や国際医療福祉大学では病院を基盤とした体系的・段階的なチーム医療や関連職種連携演習などである<sup>4)</sup>。現在、川崎医科大学では、多職種連携教育（Interprofessional Education, 以下IPE）に関するカリキュラムを開発している。

本研究の目的は、現役医師が多職種連携についてどのように考えているかを明らかにし、医学生立場で必要と思われるIPEを提言することである。

なお、多職種連携に類似した用語として、専門職協同、専門職協働、チーム医療、チームアプローチなど、様々な用語が十分に整理されていないまま用いられている。多職種連携の領域の一つにチーム医療があり、多職種連携にはチーム医療よりも広い意味が含まれることもある。ここでは、多職種連携とチーム医療はほぼ同義で用いる。

## 2. 方法

### 1) 医師3名への調査（事前質問調査および面接調査）

規模や地域の異なる医療機関に従事し、経験年数の異なる、研究者が選択した医師3名を対象とした。すべての医療機関は、初期研修受け入れ病院である。研究対象者3名に面接調査依頼書を送付し、研究への協力を依頼した。事前質問調査として、ブループリント（医師国家試験設計表）の「必修の基本的事項」18項目のうち、重要だと思う項目を10項目選択し、その10項目について1～10位まで順位付けをもらった。面接調査実施時に、説明文書を用いて、調査目的、情報の取り扱い、倫理的配慮について説明し、個別に研究参加および録音の同意を得た。面接調査はインタビューガイド（補足1）を基に行い、ICレコーダーに録音した。面接終了後、研究責任者及び研究分担者が文字データのみを用いて解析した。

### 補足1 インタビュー・ガイド

- 
- ①あなたの所属する組織では、担当患者を転院させることになった場合、初期研修医（1～2年目）、後期研修医（3～6年目）、常勤医師（7年目以上）の医師が、患者をどこに紹介するべきか把握していますか？把握している場合、その機関は具体的に何ですか？
  - ②多職種で一人の患者の問題に取り組む場合、リーダーシップは誰がどのようにとるべきだと思いますか？
  - ③多職種連携の必要性を感じたのは、いつの時期ですか？
    1. 医学1～2年生
    2. 医学3～4年生
    3. 医学5～6年生
    4. 初期研修医
    5. 後期研修医
  - ④臨床の現場において、チーム医療の観点から医学生にぜひ身につけてほしい事は何か？（複数回答可）
    1. その中で一番身につけてほしいことは何ですか？
    2. どうしてそう思うのですか？
  - ⑤研修医が地域医療に参加する場合、多職種と能動的に協力し合うためには、医学生の時どのような地域医療実習を行うべきだと思いますか？
  - ⑥東邦大学では、医・薬・理・看護学部等の学生が合同でチーム医療実習を行っている大学もあります。仮に川崎学園において、医科大・医療福祉大・医療短大・リハビリテーション学院の学生が共同で地域医療実習を行うシステムを導入した場合どのような効果があると思いますか？
-

なお、「多職種連携」、「チーム医療」、「地域医療」という言葉の定義は、事前に説明を行わず、面接を受けた医師の思い浮かべる定義に任せて回答してもらった。

## 2) 初期研修医へのアンケート調査

川崎医科大学附属病院初期研修医 1年目41名

および2年目32名計73名のうち30名を無作為抽出し、アンケート調査を行った。IPEに関するアンケートを配布し、無記名で記入してもらった(補足2)。

なお、本研究は川崎医科大学倫理委員会に承認番号2893-1として承認された。また、本研究では、申告すべき利益相反はない。

### 補足2 多職種連携教育に関するアンケート調査票

この度は、アンケート調査にご協力いただき誠にありがとうございます。本調査は、多職種連携教育についての無記名のアンケート調査です。多職種連携教育に関する調査を行い、今後の医学教育に役立てます。調査結果は「医学研究への扉」で発表される予定です。皆さまの個人情報は、取得しません。調査にご同意頂けるようでしたら、アンケートにご回答ください。

①多職種連携という言葉を知ったことがありますか？

- はい  
いいえ

②医学生時代に多職種連携を学ぶ機会がありましたか？

- はい  
いいえ

③これまで経験した患者さんで、多職種連携が必要だと思ったことがありますか？

- はい →④に進みます  
いいえ →⑤に進みます

③で「はい」と回答された方だけに伺います。

④多職種連携の必要性を感じたのは、いつの時期ですか？

1. 医学1-2年生
2. 医学3-4年生
3. 医学5-6年生
4. 初期研修医

⑤初期研修中、多職種連携を学ぶ機会がありましたか？

- はい  
いいえ

⑥看護師やソーシャルワーカーなどが参加する退院支援カンファレンスに参加したことがありますか？

- はい  
いいえ

⑦臨床の現場において、チーム医療の観点から医学生にぜひ身につけておきたかった事は何ですか？(複数回答可、自由記載)

⑧回答者について、以下の質問に答えて教えてください

医師免許取得年西暦 \_\_\_\_\_ 年 性別 男 女

### 3. 結果

#### 1) 医師3名への調査（事前質問調査および面接調査）

面接調査を行った医師の背景を表1に示す。A医師は職歴5～10年の女性医師であった。都市部の総合病院に勤務していた。B医師は職歴30～40年の男性医師であった。山間地域の地域医療を支える急性期病院に勤務していた。C医師は職歴20～30年の男性医師であった。山間地域の地域医療を支える家庭医療型診療所に勤務していた。

医師3名に共通して上位5位以内に入った項目は“チーム医療”のみであった（表2）。3名のうち2名が選択した項目は，“医療の質と安全の確保”，“医療面接”，“一般的な身体診察”，

“医師のプロフェッショナルリズム”であった。“チーム医療”と“医療の質と安全の確保”はいずれもIPEと関わりが深いものであった。

今回面接調査を行った医師3名に限って言えば，多職種連携の必要性を感じたのは，初期研修医から後期研修医の時期であった（表3）。面接調査を行った医師の年齢が若いほど，多職種連携の重要性をより早期から認識していた。チーム医療の観点から医学生に身に付けてほしいことは，コミュニケーション能力に関連する事項や多職種連携の必要性を理解することであった。また，全医師が卒前に多職種連携教育を行うべきであると認識していた。多職種と能動的に協力し合うためには，地域医療実習をはじめとした臨床実習において，複数の学部・学

表1 面接調査を行った医師の背景

	A医師	B医師	C医師
職歴	5～10年	30～40年	20～30年
性別	女性	男性	男性
勤務先	都市部 総合病院	山間地域 急性期病院	山間地域 家庭医療型診療所
病床数	約650床	約200床	0床
総職員数	約1,100名	約300名	約20名
医師の数	約150名	約50名	約10名
医師以外	約950名	約250名	約10名
人口	約720,000人	約45,000人	約6,000人

表2 医師3名への事前質問結果

	A医師	B医師	C医師
1位	医療の質と安全の確保	医療の質と安全の確保	医療面接
2位	チーム医療	社会と医療	主要症候
3位	医療面接	チーム医療	一般的な身体診察
4位	一般的な身体診察	医師のプロフェッショナルリズム	医師のプロフェッショナルリズム
5位	臨床判断の基本	生活習慣とリスク	チーム医療

表3 医師3名への面接調査

	A 医師	B 医師	C 医師
質問1: 多職種連携の必要性を感じたのはいつですか	● 初期研修医	● 後期研修医	● 院内連携: 初期研修医 ● 院外連携: 後期研修医
質問2: 臨床の現場においてチーム医療の観点から医学生にぜひ身に付けてほしいことは何ですか	● 医師1人ではなく、多くの医療スタッフが関わったら患者がより幸せになるという認識	● 患者、家族、医療スタッフに誠意を伝えること。 ● 相手の対応からその状況を推し量ること。	● 相手の考えや感情を引き出し理解する力 ● 多職種の強みや苦手なことを知ること ● 患者さんとフラットな関係性をつくる社会性
質問3: 研修医が地域医療に参加する場合、多職種と能動的に協力し合うためには、医学生のとときにどのような地域医療実習を行うべきだと思いますか	● 学生の誠実さや真面目さが向上する実習	● それぞれの職種の業務内容を理解できる実習(多職種合同で教育・実習を受けるなど)	● 薬学部・看護学部・リハビリなどが参加する実習 ● 複数の他職種と関わる多職種連携実習
質問4: 仮に川崎学園において、医科大学・医療福祉大学・医療短期大学・リハビリテーション学院の学生が共同で地域医療実習を行うシステムが導入された場合、どのような効果があると思いますか	● 学生時からチーム医療の意識が根付く	● それぞれの職種の業務内容の理解が進む	● 他職種への理解の発展

科の学生が共同してIPEを行うことが必要であると提案したのは一人だけであった。

参考までに、3名の医師は、実際に本学でIPEの概念を取り入れた地域医療実習を構築した場合には、積極的に各機関での受け入れなどの体制作りにも協力可能であるということを述べられた。

## 2) 初期研修医へのアンケート調査

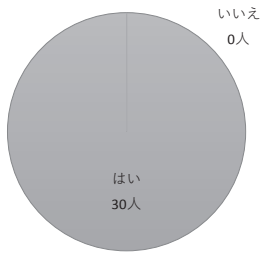
対象者である初期研修医30名全員がアンケートに回答した。30名全員が多職種連携という言葉聞いたことがあり、かつ、これまでの研修の中で多職種連携が必要な症例を経験していた

(図1)。少数ではあるが、医学生5-6学年時に多職種連携が必要であると感じていたものもいた。一方で、医学生の時に多職種連携を学ぶ機会がなかったものが40%おり、初期研修中でも多職種連携を学ぶ機会がないと回答したのも約20%いた。

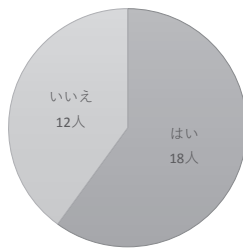
## 4. 考察

今回の研究で判明したことは、医師が卒前のIPEの機会が不足していると感じていたこと、卒前に医師以外の職種の業務内容を十分に理解したいと感じていたことであった。さらに、総合病院のみならず、地域の病院や診療所の医師

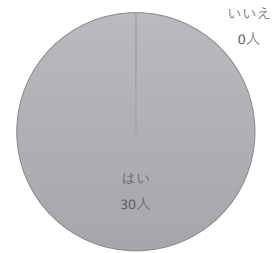
質問1. 多職種連携という言葉聞いたことがありますか？



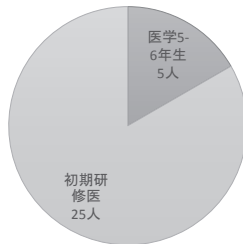
質問2. 医学生時代に多職種連携を学ぶ機会がありましたか？



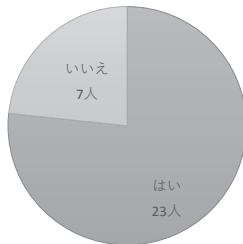
質問3. これまで経験した患者さんで、多職種連携が必要だと思ったことがありましたか？



質問4. 「質問3」の回答にて「はい」と答えた方に伺います。多職種連携の必要性を感じたのは、いつの時期ですか？



質問5. 初期研修中、多職種連携を学ぶ機会がありましたか？



質問6. 看護師やソーシャルワーカーなどが参加する退院支援カンファレンスに参加したことがありますか？

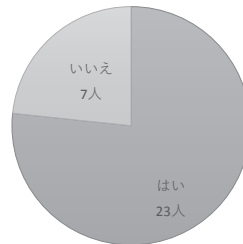


図1 初期研修医へのアンケート調査

も卒前にIPEを行うべきと認識しており、学部連携型地域医療実習の実施に好意的であったことも判明した。

IPEの定義は英国のIPE組織である英国専門職教育推進センター（Centre for the Advancement of Interprofessional Education: CAIPE）が提案したものが広く受け入れられている。その内容は、「2つ以上の専門職者が、連携・協働の質、ケアの質を向上させるために、共に学び、お互いから学び合いながら、お互いについて学ぶ機会」とされている。IPEが現代の医療の世界で注目されている理由として、以下の2点が重要であると考えられる。

(1) 医療の高度化、細分化、分業化が急速に進んでいると同時に、医療の安全性と質の保証へ

の要求水準が非常に高くなっていること

(2) 超高齢化社会を迎えつつある地域のなかで、身体心理社会倫理的な要因が絡み合う、複雑で困難な健康問題にチームで取り組む機会が急速に増加してきたこと、である。

以上を踏まえ、医学生が経験すべきIPEについて考えた。1-2学年時、3-4学年時、5-6学年時に分けて、提案をしたい。

1-2学年時には、医療関連職種の特徴を知るために他職種の見学・体験実習を行う。学習対象者は、医学生である。学習方法として、講義と臨床実習を考えた。講義では、医療関連職種の特徴を学び、それぞれの職種が臨床の現場でどのように医師と関わっているかを学ぶ。臨床実習では、看護師の役割を理解することを学

習目標とし、病院体験実習を行う。看護師とともに患者ケアを含む看護業務を経験し、看護師から見た医師はどういう立場なのか、医師としてどのように医療現場で振る舞うことが望ましいのかを考える。

3-4学年時には、多職種連携について具体的な症例で理解を深めるための課題解決型学習(Problem Based Learning,PBL)を行う。学習対象者は、川崎医科大学医学科の学生のみではなく、川崎医療福祉大学や川崎医療短期大学、川崎リハビリテーション学院の学生である。これら学生から構成される学生医療チームを作成し、具体的な症例から、どのように患者に関わるかを学習、討論する。多職種連携の重要性を実践的に理解することが目標である。

5-6学年時には、具体的に多職種連携を実践するために、学生医療チームが1人の患者を担当し、学生による多職種カンファレンスを行う。それぞれの専門的視点から事例に応じたアプローチ・連携を模索するとともに、課題を抽出し、その改善策を検討、評価する。また、学生による多職種連携カンファレンスには、医師、看護師、それ以外の他職種にも参加してもらい、一緒に討論をしたい。

全学年を通してIPEを行うことにより、医学生のみならず、各学生が医療スタッフとなったときに多職種連携を円滑に行えると考えた。実際、本学園関連施設には、川崎医科大学のみならず、川崎医療福祉大学、川崎医療短期大学、川崎リハビリテーション学院が揃っており、様々な医療職を目指す学生とともに学ぶ環境が構築されている。その環境をうまく活用することによって、IPEを行うことは実現可能と思われる。

今回の研究を通して、医学生のうちに多職種連携について学び、経験することは重要であり、是非、本大学でもIPEが進められるような環境になっていくことを希望する。

## 5. 謝辞

本研究の実施に当たり、面接調査に協力して下さった3名の先生、およびアンケート調査に協力して下さった川崎医科大学附属病院初期研修医30名の先生方をはじめとする関係各位に、心から感謝致します。

## 参考文献

- 1) 大島伸一：超高齢社会と医療. 学術の動向 1: 76-79, 2013.
- 2) 朝比奈真由美：プロフェッショナルへの初期教育の実際. 専門職連携教育 (IPE) - 質の高い専門職連携 (IPW) をめざす卒前教育 -. 日本内科学会誌 100:3100-3105, 2011.
- 3) 医学教育モデル・コア・カリキュラム (平成28年度改訂版 (最終案)) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/032-2/gijiroku/\\_icsFiles/afiedfile/2017/03/13/1382695\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/032-2/gijiroku/_icsFiles/afiedfile/2017/03/13/1382695_001.pdf)
- 4) 専門職連携教育 (IPE) の現状と展望. 医薬ジャーナル 51:51-106, 2015.